⑪　ＣＩ活動は組織イメージを変革できるか：導入一年後のフォローアップ（Ⅰ），（Ⅱ）　産業・組織心理学会第６回大会発表論文集，74-79．若林　満と連名。
⑫　ＣＩ活動と従業員の組織に対する意識（３）――ＣＩ活動開始１年間の変化を中心に――　日本社会心理学会第31回大会発表論文集，174-175．若林　満と連名。

『個人のもつ志向性が状況認知および意思決定に及ぼす効果』という研究課題で日本学術振興会特別研究員の採用内定をなんとか得ると同時に着任したため，辞退することとなった。振り返ってみると，まるで研究課題まで辞退してしまったかの印象を受けてしまう。周辺的な問題と中心的問題との統合を目指しつつ，研究に取り組んでいきたい。

研　究　経　過　報　告

吉　崎　一　人

個人研究について概要をのべる。

１．「学習経験による処理半球優位性の移行」について

・“Shift toward left visual field advantage after learning experience” の *The International Journal of Neuroscience* への掲載が認められ，1990年内に掲載されることが決まった。

・学習経験と大脳半球機能差との関連についてのレビュー並びに各論文についての評価，さらには自らの研究結果のまとめ等を含んだ論文を完成させた（本学部紀要「学習経験からみた大脳半球機能差」）。

・関西地区で行われている学習理論研究会（代表者北尾倫彦先生）で，「学習経験からみた大脳半球機能差」というテーマで研究発表させていただき（1990年８月），有益な示唆が得られた。

２．左右半球のコントロール機構の働き

・左右半球での情報処理の制御機構についての新たなモデルにそって，いくつかの実験を５月より開始している。

結果の概要並びに，具体的なモデルについてここで紹介することはできない（学会発表さえしていない）。というのも，データがまだ不十分であることに加え，モデル，パラダイムについて，再熟考する必要があるためである。

確かに左右半球での統合過程や制御過程については，ラテラリティ研究のここ数年の流れに沿ったものではある。しかしながら，洗練されたモデルや実証的な報告はまだされておらず，自らのデータを提出するまでには，時間をかける必要があるだろう（途中でつぶれる可能性も高い）。

また当然のことながら，このテーマはこれまでのテーマとの関連性が強く，将来的には統合された研究テーマとして進めて行きたい。

研　究　経　過　報　告

池　田　博　和

登校拒否問題に関しては，昨年度の教育学部心理教育相談室紀要に「登校拒否に関する研究，第Ⅳ報・身体性の問題，その１」を載せたが，その後の展開が残されている。登校拒否研究会としては，これまでの経緯をそろそろひとつにまとめようという動きになってきている。「共通感覚」論を軸にした総括，母親面接の問題，家庭教師的接近の方法等を含め，われわれ独自の立場を明確化できればと思う。来年の春頃が目処になろう。

同紀要には「思想としてのカウンセリング」と題する巻頭言を執筆した。末期患者へのカウンセリング等，重いテーマを取り上げたが，私としては正面きってカウンセリングとは何かという問題を論じたのは初めてであり，多少面はゆいところもあるが，やはりそう考えざるをえないものとして明確化できる機会となったことは幸いであった。

「生徒の自主性・自律性を育てる教育」については，

今年も東海心理学会において発表した。なお，この主題は文部省特定研究「教育の場における相互作用の実証的総合研究」報告書に「学校場面における人間関係の研究」と題して報告した。しかしながら，学会発表の折にも問題となったように，自主性・自律性を育てるというような非常に抽象的なテーマに関しては具体的に語らないと真意が伝わらないので，ある中学校における数年の試みをひとつの事例として詳細に記述するため，「生徒指導からの挑戦」の副題のもとに一書として刊行することを計画しているところである。

投映法に関しては，長年の懸案であった「ロールシャッハ解釈・名古屋大学式技法」は改定版とまではいかず，「増補版」を編集，刊行することができた。

平成元年度特別研究経費による「キャンパスの精神的健康増進に関する研究」は，多くの大学院生諸君の協力をえて，何とか三月末までに仕上げることができた。時間的制約の中で十分満足のできる考察にまでは至らなかったが，今後，現代大学生における「人格障害」傾向を検討していく方向での多くの示唆がえられたことは収穫であった。これに関する諸研究は本年の日本教育心理学会にも発表した。

ほかには，雑誌「季刊・精神療法」の特集「精神療法の教育・訓練」のために依頼されて「コメントの教育効果について」を述べた。また日本心理臨床学会の機関誌「心理臨床学研究」には，キーン・A 著，板谷訳「三つの存在の相，実存臨床心理学への接近」についての書評を書いた。これらは秋に刊行されるはずである。とくに後者は久しぶりに現象学的方法についてあらためて考えさせられた点で貴重な機会となった。